

じめ、彼らのなかから生まれはじめた中核、フロントなどの諸派の分立の間隙をぬって代々木がクーデターを敢行したのだ。67年の橋本が、橋本派だけでなくトロツキズム・反スターリニズム潮流にもおよんだという点に、第二期学園闘争を通じて平和と民主主義運動への大学の拠点化と開放、あいつく授業料闘争をとおして、今日、宗教系大学をも下回る全国最低の授業料をうみだした立命館学生運動が歴史に与へられた特徴と限界を示している。代々木の橋本一修が正主への転落は、67年の転落と変遷の迷を解くものである。そして、橋本改革派は左旋回する。フロントの盛衰は、立命館民主主義の絶頂と腐敗のもう一つの道程なのである。

・フロント系が、クラス、サークル、研究室をあげて強力な大衆運動を組織していた文学部自治会の執行部の構成はその典型。66年、フロント系中核。67年、フロント系中核+フロント。68年、三派連立に失敗し、副委員長と自治委員会多数派が民青。民青のあいつく暴行と威嚇のなかで10月に名和委員長(フロント)解任し、民青が執行部をつくる。

民青の文目クーデター、法目的の分裂や、代々木の包囲下、左派の拠点として残っていた大学院経済研究科の無期限ストライキ入りなどのなかで代々木民青は総長選挙を射程距離においた新聞社(学内唯一の世論機関)に手をつけた。

学園新聞社騒動事件の事実経過

・占拠・解除、暴力・批判という闘いの
きまようなはじまり

立命館全共闘連帯の運動の発端とな。た学園新聞社に対する民青の暴行(12月12日、12月13日)を、いま、ドキュメント風に整理してある。

12月12日午後1時

内藤三蔵学友会執行部学園委員長以下9名の民青派学生が「入社したい」という口実で、新聞社編集室におしかける。応対した新聞社員は「新聞社の活動内容と入社の一般的手続き」を説明し、原稿整理の忙しい時期(金曜日に印刷所へ持込む)であり、個々人との具体的な話し合いを月曜日(新聞発行日)以降に継続したいと答える。

同、午後2時20分

文自執行部書記長を始めとする数十名が、新聞社BOXとその前にある存心館16号教室を占拠し、かけつけた数十人のサークル関係者をおいだし、午後七時まで約五時間にわたって幹事社員を軟禁、社員に対する暴行とBOXの内部を破壊する。

午後七時、小畑学友会委員長が「仲介したい」として学園新聞社に現われ、中央事業団体会議を設け、ここで事態解決をはかることを提案。

学園新聞社はこれに同意し、即座に中央事業団体会議が学生課会議室において、学友会委員長、学園新聞社、立命館評論編集部、立命館放送局、体育会、応援団の参加によって開催。

他方学園新聞社は、同時に、実質的な軟禁状態のなかで、「入社希望者」との話し合いを再開。

中央事業団体会議において、学園新聞社は、「入社という組織的問題に対する中央委員長(学友会委員長)の不当な干渉は受けたくない。今日の数々の活動記者については徹底した追及を行なう。」と前提したのち、以下の四点にわたる基本的立場を表明。

1. 中央事業団体として本字一、二部学生を社員の対象とする
2. 年間活動計画に基づいて四月から五月初日の新入生を対象とし

た募集の入社期間が原則である。

3. 組織的な編集活動を展開する現実的条件を要する。
4. それ故に、12月という時期の例外的な大規模入社希望については受け入れ体制に関する組織的な検討を要する。

従って、入社希望者との話し合いを16日に設定したい。」

(12月13日学園新聞社ビラ)

これに対して学友会は、サークル活動として立命一、二部学生ならば回生にかかわらず入社出来ないのはおかしいと見解を述べた。全体として学友会の主張している事は大前提であるとしながら述べられた新聞社の主張する四点は新聞社特有の事情として認めつつ、更に中央事業団体会議では以下の五点を確認した。

1. 学友会としては、各パートに対し批判はできても干渉はできない。
2. 学友会の性格は、各中央団体の発展を望み協力していくものだ。
3. 今後、この問題の処理に関しては、関係パートから資料を提出させ、中央委員会でも検討していく。
4. のちのちのこの問題に関しては、関係パートで話合って解決策を見つめる。

5. 中央委員長は、各中央パートを批判することはできても命令することはできない。」(12月16日体育会本部ビラ)

午後9時、学園新聞社は、中央事業団体会議での以上の確認事項を、中央事業団体会議と併行して行われていた「入社希望者」との話し合いの場に伝えるとともに、「15日に幹事会を開き検討し、組織的方針性をもって16日2時から話し合いを再開したい」と旨、伝へ「活動の妨げになるから今夜は退去して欲しい」と要請。

内藤学友会学園委員長ら、入社希望者と彼らを支持すると称する数十名の学生は、これを了解せず「入社を今日の時点で確認せよ」とあくまで要求、社員の軟禁状態を続ける。これに強く反発する学術サークル・J連帯評議会そして党派としては唯一「体育同協会」派などが実力牽連を主張し、緊迫する。体育会本部の再三再四にわたる説得もあってゲバルトへ発展しなかったものの、キャンパスを威圧する二部民青の包囲という悪条件下、反民青派のこもる学館などから完全に孤立する新聞社の異常な状況をつきやぶれたかった。

民青は正式な話し合いの場で交渉を推しすすめながら、こうした反民青派の動きを二部民青の応援を得て、キャンパスから追いついてしまおうという方法によって力づくの解決を準備していた。

午前0時、退社しようとする新聞社主幹社員全員を暴力的に監禁するとともに、新聞社BOXと、そこに通じる存心館学舎の一部を内部から事実上のバリケード・占拠状態に入る。

午前3時45分、警連合を中心とした学生、約二〇〇名が、ヘルメット、角材棒で存心館前に結果。「新聞社の窓ガラスを割って進入し、そこから軟禁されていた社員全員を救出」(12月16日体育会本部ビラ)

午前4時30分、新聞社BOXにいた学生が、約二十名は、バリケード封鎖の中に閉じこもったまま、存心館占拠を維持しつつ、学友会BOXに通ずる存心館地下道から応援部隊を序々に結集させ始めた。

午後12時、登校した学生が、続々存心館前に結集し、緊迫した状況の中で、「学友会一派のサトウケル破壊、存心館占拠抗議集会」が学園新聞社、立命大放送局、立命評論、学術本部、学友会連帯の共闘によって開かれる。この集会と13日の行動の段階までは、主要な党派は姿をあらわしていなかった。

その朝、ビラを配ろうとした新聞社員が、学友会執行部に連行され、暴行を受けるなどの事件が発生し、広小畑キャンパスのまん中に位置する存心館を占拠する民青派は学内を威圧しつつ、集会は学友の登校をまって開かれたというのが実情であった。